日本共産党(日本のこえ)へ結集しよう！

訴え

(一)

戦後十九年をへた現在、内外情勢は新しい転換の階段にはいりつつある。これを反映して日本の各階級を代表する諸党と諸勢力はそれぞれ準備をととのえようとしている。

日本の主要な政党は最近つぎつぎに大会をひらきつつある。十一月中旬の公明党創立大会、下旬の日本共産党(代々木派)についで十二月には日本社会党、自由民主党も大会をひらこうとしている。

これはけっして偶然の暗合ではない。また来年の国会選挙の準備のためだけでもない。

われわれが、いまここに、日本共産党(日本のこえ)として出発するにあたって、日本の共産主義者の進むべき道をあきらかにするのも、この重大な時期に広く同志の人びとを結集して、労働者階級、勤労人民の解放の事業を実現するためである。

日本共産党(代々木派)が第九回大会で決定した長大な「中央委員会報告」には、まさにこの今日の時期を特徴づける基本的観点がまったく欠けている。

日本資本主義は、アメリカに依存しながら一九五〇年代にはいって戦前の工業生産水準を回復し、その後一〇数年にわたって「高度成長」をつづけた。その秘密は戦後の技術革新と結合した低賃金と勤労人民にたいする重税と独占への資金の集中にある。今日では、鉄鋼をはじめ多くの工業部門の生産設備と生産額は、アメリカを除く主要資本主義諸国と同列にまで発達してきた。日本資本主義は戦前以上に巨大な独占体の支配する帝国主義強国となった。この「高度成長」の諸矛盾が、最近ますますはっきりとあらわれてきた。多くの工業部門では過剰生産と同時に、設備の拡大と生産額の増加が見られ、消費物資価格高と金融引きしめ、中小企業と農業の収奪が当面の重要問題となってきた。

佐藤内閣は、この深刻な経済的困難を反動的に打開する使命をになって登場した。「経済の成長を安定基調にのせ」「無駄を排し、貯蓄への関心」をよびかけ、「寛容と調和」を説いているのは、新しい形の労資協調と、民族主義による反動攻勢の強化を目ざすものである。

世界の資本主義諸国にも、共通の現象がみられる。最近のポンド危機は世界資本主義体制の諸矛盾の集中的あらわれであり、資本主義の全般的危機の深まりと結びついている。世界資本主義体制は、帝国主義諸国の対立を鋭くし、そのなかでアメリカ帝国主義の相対的地位は次第に低下している。

帝国主義諸国の市場獲得競争は空前の規模で展開されており、それはまた国際労働運動の新しい高揚をもたらさずにはおかない。

社会制度を異にする国ぐにのあいだの平和共存、全面的かつ完全な軍縮、熱核戦争防止を求める世界人民の闘争は、さらに発展している。この情勢のなかで民族解放運動と新興諸国の真の独立のための闘争は、ますます強力になっている。これにたいして、最近の世界政治では、帝国主義の植民地制度を維持するための民族的弾圧がきわめて露骨になっている。南ベトナムとコンゴの現状はそれをよくしめしている。アジアでは、アメリカ帝国主義がベトナム人民の英雄的抗戦に当面して、窮境におちいっている。アメリカ帝国主義は、日本にある基地をアジア侵略のために最大限に利用し、日本をその目したの同盟者として利用しようとしている。原子力潜水艦の日本寄港や沖縄の主席任命の強行、日韓会談もみなそうである。これに協力しながら、日本帝国主義はその強化した経済力を利用して、南朝鮮、台湾、東南アジアに帝国主義的膨張政策を推進しようとしている。

帝国主義者の侵略と戦争をくいとめる決定的な要因は、世界的に見れば、社会主義体制であり、これと国際労働運動、英雄的な民族解放運動が統一してたたかい、帝国主義者の侵略と戦争政策を打ち砕き、資本主義体制を急速に弱めつつある。ソ連をはじめ社会主義諸国は、ベトナムやコンゴにおける帝国主義的侵略にたいして断固たる態度をとることによって、帝国主義者の侵略拡大に大きな打撃をあたえている。

(二)

こうした情勢のなかで開かれた日本共産党(代々木派)第九回大会は日本共産党の革命的伝統、プロレタリア国際主義、マルクス・レーニン主義を放棄し、労働者階級の前衛としての役割を自ら否定し、日本人民の利益に重大な損害をあたえるものとなった。われわれはこの大会を認めることはできない。

第一に、この大会で決定された中央委員会報告は、第七回、第八回大会が満場一致で承認し、現綱領の基準となっている国際共産主義運動の総路線を示す二つの文書――モスクワ宣言と声明――をふみにじった。こうして代々木指導部は国際共産主義運動を分裂させるための先兵の役割をはたそうとしている。彼らがそのための「精神的支柱」の一つとしているのは「フルシチョフ解任は現代修正主義の敗北」であり、反ソ方針をとった「代々木の勝利」だという幻想である。しかし、このような幻想はすでに事実によって打ち砕かれつつある。

代々木指導部の誤謬の根底にあるものは、現代修正主義と現代教条主義の混合物である。

彼らは日本帝国主義を正しく評価せず、独占と国家権力とにたいする闘争をさけ、アメリカ帝国主義にたいする民族解放闘争だけを形式的に強調している。これはまた、小ブルジョア民族主義への転落である。

彼らは二つの社会体制の闘争において社会主義世界体制が優位にたち、今日の重要問題を新たなしかたで解決する現実的可能性があることをまったく認めない。平和と平和共存、民主的改革をめざす闘争を不当に軽視し、社会主義世界体制と国際労働運動に民族解放運動を対立させ、内外の労働、平和、民主運動を分裂させている。

第二に、このように誤った方針を全党におしつけるために、第九回大会はその手続きの上でもきわめて不当かつ不正常なやり方をとった。彼らは党中央委員会および幹部会の党規約にもとづく正規の運営を停止し、正しい批判的意見をもつ人々を系統的に排除した。大会代議員の選出にあたっては規約をふみにじって、事実上、上から任命する方法をとった。そのため、都道府県党会議開催前に代議員を決定し、その名簿を中央に提出させて審査し、党会議はこれを事後確認するような方法までとった。このようにして、事実上指導部が勝手に任命した代議員によって構成された大会は、全党の総意を反映せず、党規約にもとづく正規の大会として認めることは断じてできない。

したがって、第九回大会のすべての決定は無効であり、第八回大会選出の四中央委員をはじめ、全国のまじめな諸同志にたいしておこなわれた除名処分や措置は無効である。

(三)

われわれは、共産主義者が今日その任務をはたすためには、代々木指導部の重大な階級的裏切りと国際共産主義運動の破壊活動にたいして、政治的、思想的にたたかうだけにとどまらず、組織的に活動を展開しなければならない段階にきたと考える。

日本共産党を片山潜にはじまる光栄ある革命党につくりなおす事業は、長期にわたってあらゆる困難を排して前進することなしには実現できない。

この事業は、偉大な日本の労働者階級と人民にたいするわれわれ共産主義者の崇高な任務であり、日本の革命運動の進路をきりひらくためにあくまでとりくまなければならない。

この事業をなしとげることによってはじめて、われわれは代々木指導部によって破壊された共産主義者の真の団結と統一を回復し、彼らによって傷つけられた国際共産主義運動と日本共産主義運動の権威を回復し、人民の信頼を回復する道を開くことができる。

われわれはここに、党と共産主義運動を正すために勇気をもってたちあがった全国の同志諸君とともに、日本共産党の革命的伝統をうけつぐものとして、日本共産党員、誠実な共産主義者、革命的労働者、進歩と平和を愛するすべての人びとにその力を結集することを訴える。

日本共産党(日本のこえ)は、この展望に立ってモスクワ宣言と声明を守り、党綱領をマルクス・レーニン主義的原則にもとづいてさらに発展させ、日本の現実に立脚し、人民とふかくむすびつき、党生活を共産主義的基準にもとづいて確立し、創意と活力にみちた運動を展開する。

われわれは、この結集の過程で、いまなお代々木指導部の誤った指導のもとでたたかっている多数の同志、ならびに共産主義グループ、誠実な共産主義者諸君と共同の行動をとりながら、理論的、政治的、組織的一致をかちとるために、あらゆる努力をつくす決意である。

われわれはなによりも社会発展の原動力である労働者階級に依拠し、その組織的結集をはかりながら、党の建設をすすめる。われわれは労働者階級の戦線の統一のために奮闘する。われわれはこれを基礎として労農同盟の確立のために力をつくす。われわれは社会党とのあいだに、強固な統一行動をうちたてるために努力する。そして労働組合をはじめ全民主勢力の団結をめざして奮闘する。このようにして、真の大衆的前衛党が実現する。

われわれは今日まで一貫して国際共産主義運動の真の統一のために努力してきたが、この道を前進することによって、さらに積極的に寄与することができると確信する。われわれは、この道を前進することによって、労働者階級、人民とともに、平和、民主主義、独立、社会主義の日本を実現することができると確信する。

一九六四年十二月一日

志賀義雄
鈴木市蔵
中野重治
神山茂夫